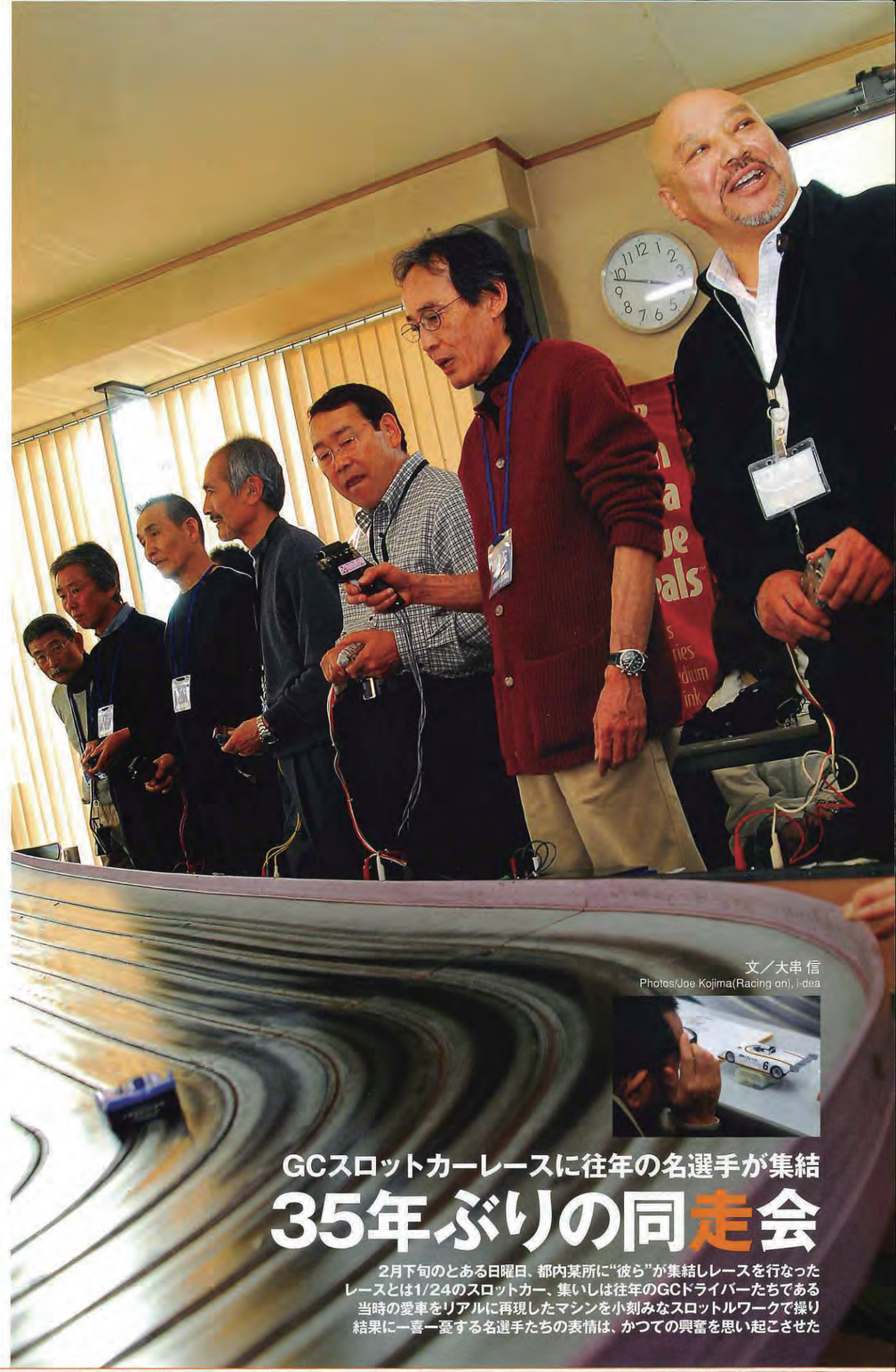

文／大串 信
Photos/Joe Kojima(Racing on), i-dea

GCスロットカーレースに往年の名選手が集結

35年ぶりの同走会

2月下旬のとある日曜日、都内某所に“彼ら”が集結しレースを行なった
レースとは1/24のスロットカー、集いしは往年のGCドライバーたちである
当時の愛車をリアルに再現したマシンを小刻みなスロットルワークで操り
結果に一喜一憂する名選手たちの表情は、かつての興奮を思い起こさせた

GC SLOTCAR RACE

当初、話を聞いた時にはスロットレーシングカーをテーマにした、ちょっと気の利いた形の同窓会かなと思っていた。なんでも、往年の富士グランチャンピオンシリーズ（GC）で活躍した名選手たちがスロットレーシングカー場に集まって、当時の愛車を再現したモデルカーを操ってレースをする趣向の会なのだというのだ。

60年代、スロットレーシングカー第一次ブームのなかに育ったわたしとしては、その後先鋭化する業界にはついていけずに疎遠になっていたが、近年モデルの精密化が進み、以前とは異なる方向で人気を集めつつあるというおおよその事情は知っていた。しかも、わたしをレースの世界に引き込んだGCのモデルカーが走るというだけでも興味があったし、その操縦者は往年の名ドライバーだというのだから、これは出かけなくてはなるまいと、逗子の山奥からクルマを走らせて上京した。

ほかの競技に比べると日本のモーターレーシング界は、過去に活躍してファンを喜ばせてくれた名選手たちをないがしろにしがちだ。現役を引退したとはいえ、多くの〝元〟選手がチーム運営等をとおしてサーキットに顔を見せているのだから、何が不満なのかと言われたらそれまでだが、サーキットを去って以来姿を消してしまった選手も少なくはない。

歴史を尊重せずに良いことはない。それよりも何よりも、事を為した人を歴史に埋もれさせてしまってはもったいない。彼らが自分の人生に誇りを持ち、現代のレースファンがその業績を改めて評価できるようになれば、日本のモーターレーシングの基盤も広がりより固まるのではないか、とかなんとか思っているところに、GCの同窓会があるというのだ。これは行かなくちゃ、だった。

というわけで、2月末の日曜日、会が行なわれるというレーシングパレス世田谷へ向かった。入口で、ちょうど到着した高橋晴邦氏に出会った。一昨年、取材でお会いして以来か？　2階へ上がると、コースの前に鮒子田寛氏、北野元氏、寺田陽次郎氏、見崎清氏、長谷見昌弘氏ら、錚々たるメンバーが楽しそうにコントローラーを操って練習走行中であった。そこに服部尚貴、道上龍というこの手のホビー好き現役が付き添っている。さらに若き日、彼らの写真を撮影してきた今はF1写真の大家である原冨治雄フォトグラファーに、旧富士スピードウェイ職員としてGCを支えてきた福士克二氏らもレースに加わる。

彼らが走らせているマシンを見て、うれしくなった。実に精密にできており、カラーリングも当時のものが再現されているのだ。ただでさえ十分価値のある車種だし、その出来具合もディスプレイモデルとして通用するしろものだ。それがコース上を走り回るのだ。

そのうち、レースが始まると皆さん本気になってくる。やっぱりレーシングドライバーにとってはどんなレースでもレースなんだよなあ、とわたしは当初微笑ましく、その本性を眺めて楽しんでいた。

ところがコース上を走るマシンを目で追っているうちに、時空を飛び越え、まるで当時のGCレースを実際に観戦しているような錯覚に襲われて慌てた。それは不思議な感覚だった。コースを走っているマシンが非常に精密であったことにも理由があるだろう。それに加えて、モデルカーをコントローラーで操っているかつてのGCドライバーたちが発散する個性が濃いことにも理由があっただろう。だからこそ、モデルカーに彼らが乗っているわけでもないのに、まるでドライバーが乗って実際に走っているかのような気配が辺りに漂い、わたしの感覚を狂わせたのだと思う。決して単なる懐古趣味をくすぐられただけではないとわたしは信じたい。

いやもう、レーシングドライバーたちの大人げないことといったらないのだ。10レースの総合で順位を決めるというルールだったはずなのに、10レース終えてみると上位6人で決勝戦をやるべきだとの声が上がる。負けず嫌いはともかく「大人なんだからさあ」という世間の常識はあの人たちには通用しない。で、予定になかった決勝戦が急遽行なわれ、結局寺田氏が総合優勝を飾った。

そのほかの選手たちは、さすがにこの結果は受け入れたものの皆どこか悔しそうな表情を隠さない。そしてどこからか「これはシリーズ戦にしてシリーズチャンピオンを争うべきではないのか」という声まで上がった。さらにはレースを終えた原フォトグラファーなど「大串ちゃん、まずい。オレ、これ買っちゃうかもしれない」とモデルカーを手に困惑半分喜び半分の顔でわたしに囁くし。

レースバ○はいくつになってもレース○カ。しかもその症状は、昔の関係者の方が重い、かもしれない。いや年齢を重ねる毎に重くなるのか。こういう熱意を原動力に取り込めれば、日本のレース界もまだまだイケるのではないかなあ、と思わされた日曜日の午後であった。R

1この日エントリーした往年の名選手たち。写真後列右から発起人である鮒子田寛、ゲストとして近年のスロットレースにも造詣が深い服部尚貴&道上龍、見崎清志、GPカメラマンの原冨治雄、元富士スピードウェイの職員でGCレース事務局を務めた福士克二。前列左から長谷見昌弘、高橋晴邦、寺田陽次郎、北野元、津々見友彦。優勝した寺田は「僕はまだ現役（だから賞典外のはず）なんだけど……」と言いながら笑顔。2色とりどりのGCマシンが一斉にスタートする様は壮観。1コーナーで必死にカメラを構えるのは……？3この日のために熱心なファンが当時の資料と記憶を頼りに再現した美しいボディ。当然ヘルメットカラーも。4鮒子田、“現役”の道上にアドバイスを請うの図。言われたとおりに粘着シートでタイヤのグリップ復活を実行。

故人を偲び、旧交を温めた……「田中健二郎を偲ぶ会」開催さる

本誌先月号でも追悼記事を掲載した、往年の名レーサー、田中健二郎。彼が昨年末に逝去したことを受け、高橋国光／北野元という後輩たちが発起人となってスロットレース開催に先立つこと2日、都内ホテルで「田中健二郎さんを偲ぶ会」が執り行なわれた。会場には現役時代の遺影とともにヘルメットなど当時を思い起こさせるゆかりの品々が置かれ、モータースポーツ界を中心に数多くの参加者が集まった。多くのレース関係者が思い出話に花を咲かせ、まるで田中健二郎さんが見守る同窓会のような、和やかな雰囲気に包まれていた。

図らずも「同窓会・第二幕」という形での開催となったスロットレースのイベント当日も、レーススタート前に鮒子田／北野両氏の提案により参加者全員で黙祷を捧げ、亡き大先輩の冥福を祈った。

（写真上）スロットレースのスタート前。“愛弟子”と言える北野／長谷見を中心に、全員で黙祷を捧げた。（写真下）「田中健二郎さんを偲ぶ会」で挨拶に立つ高橋国光&北野両氏。故人の魅力的な人格と現役時代の戦績など、詳細については本誌前号を参照のこと。